

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年8月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 理学研究科

職名・学年 教務補佐員

氏名 安藤智恵子

助成の種類	平成26年度・研究者交流支援・国際研究集会発表助成／一般		
研究集会名	第25回国際霊長類学会集会 (The 25th Congress of the International Primatological Society)		
発表題目	ガボン共和国、ムカラバードウドゥ国立公園におけるニシローランドゴリラの子供の成長と独立 (Development and independence of juvenile western lowland gorillas in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon)		
開催場所	ベトナム社会主義共和国・ハノイ・メリアホテル		
渡航期間	平成26年 8月13日 ～ 平成26年 8月18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃等	130,000円
		ホテル代	25,000円
		現地滞在費	40,000円
学会参加費		40,000円	
	上記費用の一部として150,000円を使用		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 成 果 の 概 要

京都大学大学院理学研究科  
教務補佐員 安藤智恵子

報告者は本助成を受け、国際霊長類学会に参加し、口頭発表を行った。

国際霊長類学会は、2年に一度開催され、世界各国の霊長類研究者が集って発表し、意見交換を行う場となっており、今回で25回目の開催である。今年は平成26年8月11日から8月16日までの1週間、30国以上、約600人の参加のもと、ベトナムのハノイ・メリアホテルで行われた。開催地はアジアであったが、アフリカからの参加者も多数見受けられた。計997件の口頭・ポスター発表が行われ、ゴリラについての発表は25件だった。

今回は、学会の最終日である8月16日に、世界的なゴリラ研究者である山極壽一氏（京都大学）とマルサ・ロビンス氏（マックス・プランク進化人類学研究所）がオーガナイザーを務め、ゴリラの社会構造における種間・地域比較についてのシンポジウムが開催された。近年ニシゴリラの研究が進むにしたがって、これまでマウンテンゴリラで知られていたゴリラの社会構造や生活史が、ニシゴリラとは異なるという最近の様々な報告されてきたことから、今回のシンポジウムを企画した。このシンポジウムでは各国からゴリラの研究者が計13人集まり、それぞれ口頭発表した。

報告者は、このシンポジウムの中で11:45から12:00までの15分間、Development and independence of juvenile western lowland gorillas in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon（ガボン共和国、ムカラバドウドゥ国立公園におけるニシローランドゴリラのコドモの成長と母親からの独立）というタイトルで口頭発表を行った。以下に発表内容を詳しく述べる。

近年、ニシローランドゴリラはマウンテンゴリラに比べ、コドモの身体的発達が遅いと報告されている。食物などの生態的要因がこれらに影響していると考えられている。この研究の目的は、母子間の相互関係を記録することによって、ニシローランドゴリラのコドモが低地熱帯雨林で行動学的にどのように成長し、母親から独立するかを報告することである。調査は2007年から2014年、人付けされたゴリラグループ（GG）においてコドモの成長と出産間隔について調査を行った。この結果、ムカラバのゴリラはマウンテンゴリラに比べてコドモの乳離れ年齢が高いこと、また出産間隔も長く、繁殖速度が遅いことが判明した。また母親がコドモを運ぶ方法を観察した結果、マウンテンゴリラやほかの地域の西ローランドゴリラに比べて、母親の腹部につかまる期間と背中に乗っている期間はより長く、一人で移動できるようになる時期は非常に遅かった。特に樹上ではそれが顕著に見られた。ムカラバのゴリラはこのように母親への依存が強いことが判明した。ニシゴリラはマウンテンゴリラに比べて、より果実食者であるが、ニシゴリラの生息地は果実の少ない時期に採食する草本の密度は低く、栄養価も低いことが報告されている。そのため栄養上の理由から、コドモはより長い期間母乳を必要とするため離乳が遅くなり、出産間隔も長いと考えられた。一方、ムカラバのゴリラは同種の他のゴリラの調査地に比べて樹上でネストを作る割合が非常に高いことが分かっている。さらにムカラバではまだ子殺しが観察されていないこと、樹上では捕食者からの危険が少ないことから、シルババックが常にコドモや母親のそばにいて守る必要性が少ないとも言える。また樹上背が

高いということはグループの凝集性を小さくし、シルバーバックがグループのメンバー全員に目を配り守ることが難しい。さらにコドモは樹上での移動でより母親の助けが必要となる。これらのことから、コドモは母親という時間が増え、これが母親により依存する原因をなっていることが考えられる。このようにムカラバのゴリラのコドモの身体的発達が遅く母親への依存が高い原因が、生態的理由だけではなく、社会的理由による可能性が示唆された。

このシンポジウムでは特にタラ・ストインスキ氏（アトランタ動物園・ダイアンフォッシー国際基金）の、長期調査で様々なことがすでに明らかになっているマウンテンゴリラにおいても、毎日のように新しい発見がある、という発表が非常に印象的だった。またトーマス・ブルーアー氏（マックス・プランク進化人類学研究所・Wildlife Conservation Society）の、これからは各調査地で研究している研究者たちがもっと意見交換をし、これからのゴリラ研究をさらに発展させることは大切だ、と意見したことに共感を覚えた。さらに、今までまだ研究が進んでいなかったニシゴリラの亜種であるクロスリバーゴリラ（*Gorilla gorilla diehli*）についての発表もあり、徐々にその社会形態が明らかになりつつある、ということもわかった。

今回の発表について、平成 26 年国際研究集会発表助成をご支援いただき、本当に感謝しております。国際学会の場で私たちの研究結果を発表し、今後の研究に有益な多くの意見を得ることができました。また他研究者との交流を図ることにより、これからさらなるゴリラ研究の発展に少しでも貢献できればと思います。ありがとうございました。